



先回りして止める準備をするB児



危険な場所を考えて動くB児



保育者と一緒にジェットコースターのコースを考えた7人



C児とD児に「まだ出て来ないよ!」と、言い車を止めるA児



色の付け方を相談する5人



昨日の遊びの状況を振り返り、参観日までに何をやるのか問いかける保育者



「大人も遊べる遊園地だよ!」

(幼児の実態)

11月初旬、子どもたちに共通の体験をさせたいと、遊園地遠足に行きました。子どもたちは、遊園地でアトラクションを選んで乗ったり、アヒルの競争を見たりする体験をしました。そして、幼稚園に遊園地を作り、園でも遊べるようにしたいという思いになりました。子どもたちは、それぞれジェットコースターやメリーゴーランドなど、6つのコーナーに分かれて遊んでいくうちに、「おうちの人も楽しんでほしい」と気持ちが高まってきました。そこで、保育者と子どもたちは、「おうちの園の遊園地で楽しく遊んでもらう参観日」を企画しました。一週間後の参観日に向けて、『大人も楽しめる遊園地』にするために、友達と考えながら遊んでいます。

協力園 別府市立鶴見幼稚園

11月30日、保育者は昨日の遊びの振り返りをします。12月8日の参観日に向けての今日のめあて「おうちの人も乗れるようにする」を確認し、準備は順調かな?と問いかけました。ジェットコースターコーナーのC児は「順調!」と、即答します。子どもたちは、話し合いが終わると昨日の続きをしようと、自分たちのコーナーで遊び始めます。

ジェットコースターコーナーの仲間は、7人です。ホールでは、5人が画用紙で色を付ける?「こは赤、青も付けよう!」と、たくさん貼らないかな?と、車の色付けの相談をします。ダンボールが見えないように色画用紙を貼っていきます。全ての画用紙を貼り終わる直前、他のコーナーで遊んでいたC児とD児が戻って来て、車に乗って遊び始めました。それを見たA児は、「まだ、できていないよ!」と、強い口調で言い、車を動かさないように押さえました。C児とD児は何も言わず下を向き、他の仲間4人も黙ってその様子を見ています。

遊び終わり、今日の遊びを振り返る時間になりました。保育者は、今日、困ったことはなかったかな?と、問いかけると、ジェットコースターコーナーのA児が「C君とD君、ずるい遊び方をする。仲間じゃない。僕たち5人です!」と、すごい剣幕で話しました。保育者はA児の話を聞きながら聞きまわりました。その後の縄跳びや給食、掃除などの活動では、仲間と関わっている2人の様子を見守っていました。

翌日、ホールのステージでは、7人が揃って線路のようにビニールテープを貼り、ジェットコースターのコース作りをしています。フロアのスタートからステージに板を渡した登りの斜面から、ステージを抜け、下りの斜面まで貼り終わると、保育者は7人を集めました。斜面で車を転がして、その先のコースを子どもたちと考えます。子どもたちは、実際に車を動かしながら「急に曲がるのは難しいことや、隣のアトラクションにぶつかるかもしれない」ことに気付きました。子どもたちの考えが、まっすぐ行って廊下に出て、スタートに戻ることにまとまり、一緒に考えていた保育者もそれなら、危なくないね」と、賛成します。ゴールまでのコースが決まると、子どもたちは、一気にビニールテープを貼り、コースを完成させました。

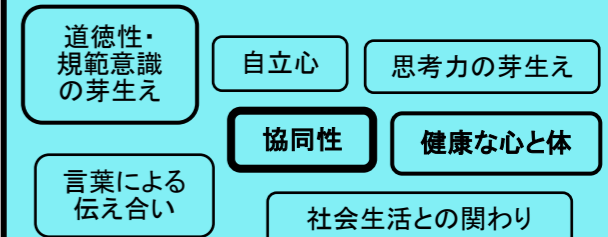
この日の振り返りで保育者は、昨日は、困ったことを話したね。今日は、仲間がいて良かったという人はいるかな?と、問いかけました。昨日、友達を受け入れられずにいたA児が「一人とも仲間になって嬉しかった」と話し、C児とD児も「仲間になれていい気持ち!」と、気持ちを伝えました。保育者は、傾きながら話を聞いています。その後、それぞれのグループが、今日の遊びの進捗状況を発表しました。保育者は「みんな乗れる?」と、聞きます。メリーゴーランドの子どもたちは「うん。乗れる。a先生が乗っても大丈夫だった!」と、話しました。さらに保育者は、安全点検は、必ずやってね」と、伝えます。そして、グループごとに、明日の遊びのめあてを話し合いました。

翌々日、ジェットコースターの仲間は、乗れるのは二人」というルールで、7人が交代しながら遊んでいました。C児は子どもは二人乗り。大人は一人しか乗れないよ」と、みんなで決めたことを保育者に話します。スタートの登り坂は5人で押していましたが、下りになるとB児の姿が見当たりません。B児は、廊下のぶつかりそうな場所に先回りして、車をガードしていました。ゴール手前でも、壁に当たる前で止められるように後ろを見ながら構えています。ゴールすると、「b先生乗って!」とみんなで声をかけ、大人を乗せてやってみます。大人でもうまくいきました。

ちょうどその時、男性の小学校の先生がきました。先生乗って!と、車に乗せました。スタートは上り坂です。よしよし!よしよし!と、自然に掛け声が合ってきます。全く車が動かないのを見かねた。先生も手伝いました。お父さんが乗る時は、坂の上がスタートに決まりました!と、お父さんが乗る時は、坂の上がスタートに決まりました!

参観した保護者から、想像以上のクオリティーに驚きました。本当に楽しく遊べました。ありがと!と、感想を言ってもらえたようです。

幼児期の終わりまでに育ってほしい姿「10の姿」



友達と関わる中で、互いの思いや考えなどを共有し、共通の目的の実現に向けて、考えたり、工夫したり、協力したりし、充実感をもってやり遂げるようになる。

事例から見られる10の育ち

協同性

A児は、イメージするジェットコースターにしよう!と、5人で相談しながら車の色付けをしていた。出来るだけ直前に、戻って来て遊び始めたC児とD児に納得いかず、厳しく接した。2人は、友達の思いを知り、楽しく遊ぶためにはどうすればよいかを考える経験となった。

次の日の2人は、同じグループの仲間という気持ちで、一緒にコースを考えたり、作ったりしたと思われた。仲間になって嬉しかった!仲間になれていい気持ち!と、互いの思いが伝わった。認め合う関係性の中で、『大人も遊べる遊園地にする』という共通の目的の実現に向け、考えたり、工夫したり、協力したりする姿が見られた。参観日でも、おうちの園の人から褒められ充実感を味わえたと思われた。

このような姿は、小学校の集団生活の中で、目的に向かって自分の力を発揮しながら友達と協力し、新しい考えを受け入れながら学び合う姿につながっていくと考えられる。

事例から見られる10の育ち

健康な心と体

子どもたちは、斜面で実際に車を転がし、進み方や速さを意識することができた。友達と繰り返し遊ぶ中で、子ども2人の重さを体感し、スリル感を味わった。友達のスリル感を味わい、B児は、安全に遊べるよう、車の動きを予測して、見通しをもって行動したと思われた。ジェットコースターの仲間も、遊園地の一員という意識の中で、他のグループの友達の話を聞き、『園の先生で試す』ことに気付いた。おうちの園の先生が楽しめるには、男性の先生でも試す必要があると感じた。時間の流れを意識したり、状況の変化を予測したりして遊ぶ経験は、小学校の生活の流れが分かると、次の活動を考えて準備する姿につながると考えられる。

協同性

保育者の援助・環境構成のポイント

《園全体で活動が展開できるよう、共通の体験を指導計画に位置付ける》

多様な感情体験を味わい、友達との関わりが深められる保育者の関わり

いざこざなど自分の思い通りにはいかない体験を乗り越えられるように、受け止めたり、仲間である時間を大事に思えるように見守ったりする。

一緒に活動を展開する楽しさや、共通の目的が実現する喜びを味わう体験ができるような環境構成

子どもたちのやりたいことが実現できるよう、日程や内容など、自分たちで進められるよう時間や場、空間を子どもたちと考える場の設定をする。